

# 令和3年度

## 一般入学試験A日程 学科試験問題

### 国語

1. 試験時間は、60分間です。
2. 問題は、この冊子の1～22ページにあります。解答用紙は別に2枚あります。
3. 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄に記入してください。
4. 問題や解答を、声に出して読んではいけません。
5. 印刷の不鮮明、用紙の過不足については、申し出てください。
6. 問題や解答についての質問は、原則として受け付けません。
7. 終了の合図があったら、すぐ筆記具を置いて、解答用紙を机の上に伏せてください。
8. この問題用紙は、持ち帰らないでください。
9. 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。
10. 答案の文字は、ていねいに、かつ明瞭正確に書いてください。
11. その他、試験の進行については、監督者の指示に従ってください。

## 植草学園短期大学

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第一問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜6）に答えなさい。

見える人と見えない人の空間把握の違いは、単語の意味の理解の仕方にもあらわれてきます。空間の問題が単語の意味にかかわる、というのは意外かもしれませぬ。けれども、見える人と見えない人では、ある単語を聞いたときに頭の中に思い浮かべるものが違うのです。

たとえば「富士山」。これは難波さんがアシテキした例です。見えない人にとって富士山は、「上がちよつと欠けた円すい形」をしています。いや、実際に富士山は上がちよつと欠けた円すい形をしているわけですが、見える人はたいいていそのようにとらえていないはずです。

見える人にとって、富士山とはまずもって「八の字の末広がり」です。つまり「上が欠けた円すい形」ではなく「上が欠けた三角形」としてイメージしている。平面的なのです。月のような天体についても同様です。見えない人にとって月とはボールのような球体です。では、見える人はどうでしょう。「まんまる」で「盆のような」月、つまり厚みのない円形をイメージするのではないでしょうか。

三次元を二次元化することは、視覚の大きな特徴のひとつです。「奥行きのあるもの」を「平面イメージ」に変換してしまふ。とくに、富士山や月のようにあまりに遠くにあるものや、あまりに巨大なものを見るとときには、どうしても立体感が失われてしまいます。もちろん、富士山や月が実際に薄っぺらいわけではないことを私たちは知っています。けれども視覚がとらえる二次元的なイメージが勝ってしまう。このように視覚にはそもそも対象を平面化する傾向があるのですが、重要なのは、こうした平面性が、絵画やイラストが提供するA文化的なイメージによってさらに補強されていくことです。

私たちが現実の物を見る見方がいかに文化的なイメージに染められているかは、たとえば木星を思い描いてみれば分かります。木星と言われると、多くの人はあのマープリングのような横縞よこしまの入った茶色い天体写真を思い浮かべるでしょう。あの縞模様の効果もありますが、木星はかなり三次元的にとらえられているのではないのでしょうか。それに比べると月はあまりに平べったい。満ち欠けするという性質も平面的な印象を強めるのに一役買っていそうですが、なぜ月だけがここまで二次元的なのでしょう。

その理由は、言うまでもなく、子どものころに読んでもらった絵本やさまざまなイラスト、あるいは浮世絵や絵画の中で、私たちがさまざまに「まあるい月」を目にしてきたからでしょう。紺色の夜空にしつとりと浮かびあがる大きくて優しい黄色の丸——月を描くのにはふさわしい姿とは、およそこうしたものでしょう。

こうした月を描くときのパターン、つまり文化的にイジヨウセイされた月のイメージが、現実の月を見る見方をつくっているのです。私たちは、まっさらな目で対象を見るわけではありません。「過去に見たもの」を使って目の前の対象を見るのです。

富士山についても同様です。風呂屋の絵に始まって、種々のカレンダーや絵本で、デフォルメされた「八の字」を目にしてきました。そして何より富士山も満月も縁起物です。その福々しい印象とあいまって、「まんまる」や「八の字」のイメージはますます強化されています。

見えない人、とくに先天的に見えない人は、目の前にある物を視覚でとらえないだけでなく、私たちの文化を構成する視覚イメージをもとらえることがありません。 **B** 人が物を見るときにおのずとそれを通してとらえてしまう、文化的なフィルターから自由なのです。

つまり、 **C** 人は、 **D** 人よりも、物が実際にそうであるように理解していることになります。模型を使って理解していることも大きいでしょう。その理解は、概念的、と言ってもいいかもしれませんが。直接触ることのできないものについては、辞書に書いてある記述を覚えるように、対象を理解しているのです。

定義通りに理解している、という点で興味深いのは、見えない人の色彩の理解です。

個人差がありますが、物を見た経験を持たない全盲の人でも、「色」の概念を理解していることがあります。「私の好きな色は青」なんて言われるとかなりびっくりしてしまうのですが、聞いてみると、その色をしているものの集合を覚えることで、色の概念を獲得するらしい。たとえば赤は「りんご」「いちご」「トマト」「くちびる」が属していて「あたたかい気持ちになる色」、黄色は「バナナ」「踏切」「卵」が属していて「黒と組み合わせると警告を意味する色」といった具合です。

ただ面白いのは、私が聞いたその人は、どうしても「混色」が理解できないと言っていたことでした。絵の具が混ざるところを目で見たことがある人なら、色は混ぜると別の色になる、ということを知っています。赤と黄色を混ぜると、中間色

のオレンジ色ができあがることを知っています。ところが、その全盲の人にとっては、色を混ぜるのは、机と椅子を混ぜるような感じで、どうも納得がいかないそうです。赤＋黄色＝オレンジという法則は分かってても、感覚的にはどうも理解できないのだそうです。

もう一度、富士山と月の例に戻りましょう。見える人は三次元のを二次元化してとらえ、見えない人は三次元のままにとらえている。つまり前者は平面的なイメージとして、後者は空間の中でとらえている。

だとすると、そもそも空間を空間として理解しているのは、見えない人だけなのではないか、という気さえしてきます。見えない人は、厳密な意味で、見える人が見ているような「二次元的なイメージ」を持っていない。でもだからこそ、空間を空間として理解することができないのではないか。

なぜそう思えるかというと、視覚を使う限り、「視点」というものが存在するからです。視点、つまり「どこから空間や物を見るか」です。「自分がいる場所」と言ってもいい。もちろん、実際にその場所に立っている必要は必ずしもありません。絵画や写真を見る場合は、画家やカメラが立っていた場所の視点を、その場所ではないところにいながらにして獲得します。顕微鏡写真や望遠鏡写真も含めれば、肉眼では見ることのできない視点に立つことすらできます。想像の中でその場所に立つような場合も含め、どこから空間や物をまなざしているか、その点が「視点」と呼ばれます。

同じ空間でも、視点によって見え方が全く異なります。同じ部屋でも上座から見たのと下座から見たのでは見えるものが正反対ですし、はたまたノミの視点で床から見たり、ハエの視点で天井から見下ろしたのでは全く違う風景が広がっているはずです。けれども、私たちが体を持っているかぎり、一度に複数の視点を持つことはできません。

このことを考えれば、目が見えるものしか見ていないことを、つまり空間をそれが実際にそうであるとおりに三次元的にとらえ得ないことは明らかです。それはあくまで「私の視点から見た空間」でしかありません。

ひとつ例をあげましょう。広瀬浩二郎さんがよくあげる例です。

広瀬さんの職場、国立民族学博物館は、大阪の万博記念公園の中にあります。一九七〇年に空前の人気を集めたあの大阪万博の会場となった場所で、現在は広大な敷地面積を誇る公園として整備されています。国立民族学博物館はその一角、かつて万博のメイン会場だった「お祭り広場」があった場所の向かって左手奥あたりにあります。

さて万博のシンボルといえば、何と言っても岡本太郎作の「太陽の塔」です。もともと、「万博のシンボル」といつても、太郎自身は万博の進歩思想にウカイギ的で、その証拠に丹下健三デザインの「大屋根」を突き破って天にのびるといふ丹下にとつては屈辱的なデザインを提案しました。つまりどちらかというと太陽の塔は「反万博のシンボル」であったわけですが。しかし大屋根も一部を除いて現存しない今となっては、大地にそびえ立つその雄姿こそ「万博公園の主」と呼ぶにふさわしい堂々たるものです。

広瀬さんは言います。「太陽の塔に顔がいくつあるか知っていますか」。そうすると、見える人の多くが同じ答えを返すと言います。曰く「二つ」であると。なるほど、確かにてっぺんに「金色の小さな顔」と胴体の中央に「大きな顔」が見えます。

でも実際には、太陽の塔には三つの顔があります。先の二つに加えて、背中側にも「黒い太陽」と呼ばれるちょっと不気味な顔がある。さきほどの月や富士山の例と似ていますが、見える人にとつては万博公園入り口方向から見たあの姿こそ、太陽の塔の姿とされている。その視点に縛られてしまうので、裏側の顔のことは気づかないのです。

「アウト・オブ・サイト、アウト・オブ・マインド」なんていう言い方がありますが、視界に入らないことは、軽んじられ、忘れられることを意味します。しかも、見える人にとつては顔は正面にあるものと相場が決まっています。まさか背中側にも顔があるとは思いません。

模型で太陽の塔を理解している視覚障害者の場合、こうした「エゴニン」は起きにくいと広瀬さんは言います。模型の場合は、すべての面をまんべんなく触ることができます。だから特定の視点に縛られることがない。腕が生えているあたりの太さや、首の傾き具合を含めて、まさに太陽の塔そのままに、立体的にとらえているわけです。

**F**、見えない人には「死角」がないのです。これに対して見える人は、見ようとする限り、必ず見えない場所が生まれてしまう。そして見えない死角になっている場所については「たぶんこうなっているんだろう」という想像によって補足するしかない。

**G**、見えない人というのは、そもそも見えないわけですから、「見ようとするで見えない場所が生まれる」という逆説から自由なのです。視覚がないから死角がない。 (注) 大岡「山」の例でも感じた、自分の立ち位置にとらわれない、

オフカンので抽象的なとらえ方です。見えない人は、物事のあり方を、「自分にとってどう見えるか」ではなく「諸部分の関係が客観的にどうなっているか」によって把握しようとする。この客観性こそ、見えない人特有の三次元的な理解を可能にしているものでしょう。

H 負け惜しみを言うわけではありませんが、見えないからこそ想像力が働く、なんていう場合もあります。ですから死角も完全に悪者だとは言えません。月の裏側に秘密基地がある、なんていうSF的な設定は、見えない人にとっては共有できない感覚でしょう。「見えないもの」とつきあっているのは、実は見える人の方なのかもしれません。

(伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』より)

\* 出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

注 筆者が協力者の一人と大岡山駅の改札で待ち合わせ、一緒に交差点を渡ってすぐの大学正門に入り、筆者の研究室まで緩やかな坂道を下って

いたときに、いつもはただの坂道としか思っていなかった道順の一部を、その人が「大岡山は、やっぱり『山』なんですわね」と言ったこと。

問1 ア～オのカタカナで示した語の傍線部分と同じ漢字を含むものを、それぞれ後の1～4の中から一つ選びなさい。

ア シ|テ|キ

- 1 テキセイな評価
- 2 病院でテンテキを受ける
- 3 テキグンを攻撃する
- 4 不正のテキシュツ

イ ジョウ|セ|イ

- 1 日本酒のジョウゾウ会社
- 2 腕がジョウタツする
- 3 ジョウキョウが悪化する
- 4 カンジョウを払う

ウ カイ|ギ

- 1 首相の記者カイケン
- 2 母校のカイコウ記念日
- 3 家屋がゼンカイする
- 4 巧みなカイジュウ策

エ ゴ|ニン

- 1 ゴカクに渡り合う
- 2 重大なカゴを犯す
- 3 ゴバンの目のような町並み
- 4 老舗のゴフク店

オ フ|カン

- 1 ファイの来客
- 2 補助金のコウフ
- 3 ひれふすことをフクという
- 4 ごくフツウの成績

問2 傍線部A「文化的なイメージ」の説明として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 それまでに見たり読んだり体験したりしたことをもとにして、自分の中に作り上げた印象。
- 2 人間の視覚に本来的に備わっている、対象を平面化して見ようとする傾向にもとづく印象。
- 3 三次元を二次元化するのには進化の過程で築き上げた視覚の特長で、対象を平面化する見方。
- 4 それまでに学んできた辞書的な知識で説明できる理解によって、現実を見ようとする見方。

問3 空欄BとDに文脈に合うように言葉を入れるときに、その組み合わせとして最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- |   |   |      |   |      |   |      |
|---|---|------|---|------|---|------|
| 1 | B | 見えない | C | 見える  | D | 見えない |
| 2 | B | 見えない | C | 見えない | D | 見える  |
| 3 | B | 見える  | C | 見える  | D | 見えない |
| 4 | B | 見える  | C | 見えない | D | 見える  |



問4 傍線部E「空間を空間として理解しているのは、見えない人だけなのではないか」と筆者が考える理由として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 見える人は一度に複数の視点を持つことができないので、実際どおりにしか見ることはできないから。
- 2 見える人は一度に複数の視点を持つことができないので、目が見るものしか見ることはできないから。
- 3 見えない人は二次元的なイメージを持っていないので、空間を実際にあるようには理解できないから。
- 4 見えない人は二次元的なイメージを持つことができるので、空間の三次元的な理解が可能であるから。

問5 空欄F・Gに文脈に合うように接続の語を入れるときに、その組み合わせとして最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- |   |   |      |   |      |
|---|---|------|---|------|
| 1 | F | さて   | G | ところで |
| 2 | F | ところで | G | だから  |
| 3 | F | 要するに | G | しかし  |
| 4 | F | しかし  | G | 要するに |

問6 傍線部H「負け惜しみを言うわけではありません」とありますが、筆者はどのよう<sup>い</sup>な<sup>う</sup>人<sup>が</sup>どのよう<sup>い</sup>な<sup>う</sup>人<sup>に</sup>どのよう<sup>い</sup>な<sup>う</sup>な<sup>り</sup>で劣<sup>る</sup>つ<sup>て</sup>い<sup>る</sup>と考<sup>え</sup>て<sup>い</sup>る<sup>の</sup>で<sup>す</sup>か。必<sup>ず</sup>傍<sup>点</sup>の<sup>要</sup>素<sup>を</sup>含<sup>め</sup>て、本<sup>文</sup>中<sup>の</sup>語<sup>句</sup>を<sup>使</sup>つ<sup>て</sup>五<sup>十</sup>字<sup>以</sup>内<sup>で</sup>答<sup>え</sup>な<sup>さ</sup>い。

第二問 次の文章を読んで、次の問い（問1〜6）に答えなさい。

私の肩書はノンフィクション作家ということになっている。いくつかのノンフィクション作品を手掛けているうちにそうなってしまったのだが、実をいうと本人はこの呼称をあまり気に入っていない。

ある時期、ジャーナリストと呼ばれたことがあった。片仮名名めいを使う職業には、どこかア浮薄な感じがある。できるなら日本語の方がいい。

ご存じかと思うが、かつて私は新聞社の社会部記者であった。本人としては新聞社を辞めて長い年月が経たいまも、変わりなく社会部記者をやっているつもりである。

しかし、組織を離れた私が、その呼称で通そうとしても、世間的には通用しない。それで、寄稿先の編集部にお任せして、適当につけてもらっていた。評論家と呼ばれていた時期もある。

私が独立したころ、ノンフィクションという呼称自体が一般的ではなかった。正体の定かでない書き手がやつつけた安手な事件物、といった種類の作品が、ノンフィクションの名で、分厚い倶楽部雑誌の「増量剤」に使われたりしていた。

それらは新聞記事を下敷きに、想像力を交えて、ふくらましカをかけたいい加減なイ代物で、書き手独自の取材の痕跡はなく、ノンフィクションというには程遠い。せいぜいいても、まがい物だったのである。

作品の実体がそういうふうでは、ノンフィクション作家が育つ道理がない。その状況の中で、ルポライターを名乗る一群が登場する。これらの人びとは、業界紙とか小さな出版社とかから転じたケースが多く、主として週刊誌ジャーナリズムを舞台に活躍を始めた。

ルポライターというのは、そのころにできたまったく新しい和製英語である。今日、これを名乗る書き手は少なくなったが、当時、雑誌系の書き手は大半がそうであった。

「ノンフィクションの時代」と呼ばれるものが到来するのは、昭和五十年代に入ってからである。昭和四十年代後半から五十年代初頭にかけて、Bこつこつとめいめいの坑道を掘るようになって作品を手掛けていた数人がいる。彼らが鉉脈を掘り

当てた。その鉱脈が本来の意味でのノンフィクションであった。

立花隆、柳田邦男、沢木耕太郎、澤地久枝、上前淳一郎それに私といったいわゆる第一世代は、沢木氏を例外にして、みな大手メディアの出身であった。立花氏は文藝春秋、柳田氏はNHK、澤地氏は中央公論、上前氏は朝日新聞、私は読売新聞に籍を置き、組織の中で力をつけてから新しい可能性を求めて巣立っていった、一種の冒険者であった。

その時期、生え抜きのフリーの書き手が見当らなかつたのは、前記の人たちが名の通つたメディアで「社員」として身分を守られ、その養分を摂取しながら育つていったのにくらべ、フリーで生きるには社会的にも経済的にも、劣悪な環境しか与えられていなかったという事情がある。

ノンフィクションをやるうとすれば、いったん生活を断念しなければならぬ、といわれた時代であった。いまの道に入つて、私が初めて手にした原稿料は、たしか一枚七百円だつたと記憶している。フリーははなから人間扱いされていなかったのである。

これでは、すぐれた人材が集まるわけがなく、育つていく条件もほぼ皆無であった。ノンフィクション前史の時代を振り返ると、死屍累々といった光景が浮かび上がってくる。

新しく登場した書き手たちは、総合月刊誌を主舞台に、取材に時間をかけた本格的な作品を発表していった。そして、それが単行本化される。一点あたりの部数は知れたものだったが、徐々に読者層が広がり、「ノンフィクションの時代」が出版社の掛け声だけでなく、現実に来るのである。ノンフィクション作家の呼び名が定着するのはそれ以降である。

ルポライターの一群から頭角を現して、今日、確固たる地位を築いている一人に鎌田慧氏がいる。氏はノンフィクション作家を名乗らない。考えがあつたことであろう。ノンフィクションを語る場合、どうしてもはずせない書き手なので、「別格」としてお名前を挙げさせていただいた。

ちよつと横道に入りすぎたようなので、話を戻そう。私はとくだん肩書にこだわっているのではない。無責任に言えば、そんなものはどうだっていいのである。

私は新聞社を辞めたあとも、社会部記者のつもりでやってきた。それがいいだけである。

ここから先は、「いい気なもんだ」という反発を受けるに違いないが、私の人生もそろそろ終わりにきているので、イ

夕チのなんとかでは無いが、少々いい気になってみたいと思う。

たいそうにいうほどのことではないが、私は社会部記者であり続けることに、誇りを持っている。では、私がいう社会部記者とはどういうものか。おいおい語っていくつもりだが、ここでは一つだけ私が見たいへん気に入っている記事の話をしてみたい。

私が「三等遊軍」をやっていたころ、朝日の社会部に門田勲という大記者がおられた。私はそのお顔も拝見したことさえ無いのだが、戦前からの新聞人で、古巣の社会部に戻られたのは、朝日の大阪本社の編集局長を務められたあとだったと記憶する。

社内での身分が何であったかは知らないが、私たち外野での理解は、この編集局長経験者が社会部に「平記者」として復帰したという、新聞界の先頭に行く朝日ならではの思い切った人事であった。

漏れ聞くとところによると、門田氏はかねてから社主家の村山於藤おむすさんと折り合いがわるく、エレベーターの中で鉢合わせしても挨拶さえしなかったという。そうした事情が、この人事の背景にあったと思われるが、社会部行きを希望されたのはご本人であった、と聞いている。Dうれしいじゃありませんか。

つとに名作家として知られていた門田氏は、現場に戻ってそれこそ水を得た魚のように、縦横に筆を揮ふるわれた。お書きになったものは、E紀行文が多く、次にG紹介するのはその一つである。

古いことなので細部の記憶はあいまいになっており、記述に間違いがあるかも知れない。その場合は、どうかお許し願いたい。

浜名湖の周辺だったと思うが、江戸期から続く蒲焼の老舗があり、門田氏はこの店を訪れる。お相手をするのはこの道ウシ十年の、七代目だか八代目だかに当たる主あまである。

うなぎは開き三年、刺し七年とかいって、焼くようになるまでには、長い修業を積まなければならない。だが、もっと年季がかかるのが焼きで、主にいわせれば焼き一生であるという。

彼の手の指は、やけどでひつつれ、内側に折れ曲ったまま伸びなくなっている。長年、備長炭の熱に焙られて変形してしまっただのである。それだけ年季を入れていても、満足に仕上がるのは一日にせいぜい一串か二串なのだそうである。

蒲焼と一口にいつても奥が深いものなんだ、とは思わせるが、料理人の自慢話の定型にやや過ぎたきらいがないでもない。だが、なぜか、皮肉が持ち味の門田氏は、その片鱗さえみせず、淡々と主の語りを追う。それでいて飽きさせないのは、さすがというべきか。

ところが、文章は終わりにきて、突如、冴えを發揮する。

「ところで先生、どういうところを差し上げましょうか」

と向き直る主に、門田氏のひとこと。

「何でもいいから、なるべく能書のつかないところをくれ」

文章はそれで締めである。すかつとしませんか。このあたりがいかにも社会部記者なんだなあ。権威とか権力とかに、おいそれとは恐れ入らない。そんなことは恥ずかしいと心得ている。社会部記者気質の一端がそこにのぞいている。

たった一本の記事が、読む人の人生観に大きな影響を与えることだってある。「門田勲」になりたい。私は心底そう思った。編集局長のポストに就くなどは、将来の夢として眼中になかったのである。

のちに書くが、読売には私一人の力ではどうにもならない事情があつて、私は真正銘の平記者のまま社を去った。でも、心の持ちようとしては、変わりなく社会部記者として生きてきたつもりである。

(本田靖春『我、拗ね者として生涯を閉ず(上)』より)

\* 出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部ア～エと意味が最も類似した言葉を選び、漢字で書きなさい。

ア

- 1 ムボウ
- 2 モウソウ
- 3 ケイハク
- 4 ケイキョ

イ

- 1 ソシナ
- 2 シナモノ
- 3 ニセモノ
- 4 ダイヨウヒン

ウ

- 1 コウギ
- 2 ケイベツ
- 3 トウロン
- 4 ハイハン

エ

- 1 タイケンダン
- 2 ドウチュウキ
- 3 シュキ
- 4 ビボウロク

問2 傍線部A「ふくらまし」と類似した意味で使われている言葉を本文中から抜き出ささい。

問3 傍線部B「こつこつとめいめいの坑道を掘る」とはどういう意味か。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 新聞記事をもとに想像すること。
- 2 独自の取材に時間をかけること。
- 3 目立たないで原稿を書くこと。
- 4 冒険心で新たな世界に出ること。

問4 傍線部C「生活を断念しなければならぬ」とはどういう意味か。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 ノンフィクションでは苦勞が絶えず、生活どころではない。
- 2 ノンフィクションに全精力を傾けなければならない。
- 3 ノンフィクションで得られる収入は微々たるものである。
- 4 ノンフィクションをやってもすぐれた人材と見なされない。

問5 傍線部D「うれしいじゃありませんか」という気持ちはなぜ生まれてきたのか。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 門田氏が社主家と安易に妥協せず、低い地位に甘んじたこと。
- 2 門田氏に限らず、人の希望がかなうことはよいこと。
- 3 門田氏が責任を負わなくても良い気軽な地位につけたこと。
- 4 門田氏が自分の生き方を貫くために地位の低い平社員になったこと。

問6 この文章から読み取れる、著者が目指す生き方について、三十字以内で書きなさい。



第三問 次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えなさい。

その日、幌舞は時も場所もわからぬほどの吹雪になった。

古い駅舎は、音も光もない純白に埋ずもれた。

<sup>A</sup>少女は決して<sup>A</sup>饒舌ではなかったが、老駅長の語る思い出話を、いちいち感動をこめて聞くのだった。自分でもどうかしていると思いつながら、乙松は半世紀分の愚痴や自慢を、思いつくはしから口にした。

それらは古ぼけた<sup>B</sup>セイフクの胸ふかく、たとえば機関車の油煙の匂いや炭ガラの手ざわりとともに、<sup>おろ</sup>澱のように凝り固まっている記憶だった。ひとつの出来事を語るたびに、乙松の心は確実に軽くなった。

特需景気に栄えた時代。駅舎が死体で一杯になった炭鉱事故。機動隊がやってきた労働争議。そして灯の消えるように、ひとつずつ閉められていった山。

一番つらかったことは何かと訊かれて、乙松は娘の死を語らなかった。それは私事だからだった。佐藤乙松として一番つらかったことはもちろん娘の死で、二番目は女房の死にちがいない。だがポッポヤの<sup>B</sup>乙松が一番悲しい思いをしたのは、毎年の集団就職の子らを、ホームから送り出すことだった。

「——あんたより二つ三つもちっちえ子供らが、泣きながら村を出ていくのさ。そつたらとき、まさか俺が泣くわけいかんべや。気張ってけや、って子供らの肩たたいて笑わんならんのが辛くってなあ。ほいでホームの端っこに立って、汽車が見えなくなってもずっと汽笛の消えるまで敬礼しとったっけ」

そういえば、あのころ仙次は機関士だった。集団就職の汽車は、ずっと警笛を鳴らし続けていた。

ポッポヤはどんときだって涙のかわりに笛を吹き、げんこのかわりに旗を振り、大声でわめくかわりに、<sup>ウ</sup>喚呼の裏声を絞らなければならないのだった。ポッポヤの苦労とはそういうものだった。

「やあや。すっかり話しこんじまって、最終の時間だべや。仕事すませたら寺まで送っていくべ。ほれ、風邪ひくからこれ着てな」

乙松は綿入れを少女の肩に掛けて事務室に下りた。外套を羽織り、帽子の顎紐をかけ、カンテラを提げて駅舎を出る。柱

時計が七時を打った。

手早く雪を掻くと、乙松はプラットホームの先頭に立った。トンネルから光の輪が現れた。雪の帳とぼりを突いてきたのは、たくましいDD15のラッセルだ。

空身からみの気動車を牽ひいて雪を噴き上げながら走ってくるラッセルの姿を見たたん、乙松は心の底から申しわけないと思った。俺のわがままをとうとう最後まで聞いてくれたのだから、退職金も恩給も受け取るわけにはいかねえ、と思った。

右手にカンテラを上げ、左の指をまっすぐに線路に向けて、乙松は押し殺した喚呼の声を絞った。

若い機関士と一緒に、なじみの操作員が降りてきた。

「やあ、みっちゃん。きょうは大ごとだべ。一服つけて、汁粉でも飲んでってや」

「せっかくだが、乙さん。折り返して本線のラッセルせねばならんでねえ。ちよつくら小便だけ——ああ、これ機関区のみんなから」

操作員は立派な果物籠を差し出した。

「なあんも。まだ三月みつきも余つとるしよや。餞別せんべつには早すぎるべさ」

「そうでないってば。仏壇にお供えして」

二人の乗務員は肩を揺すりながら便所へと走って行った。

ラッセルを送り出したあと、乙松は機関区からの届け物を提げて駅舎に戻った。

そらとぼけてあんな言い方をしたけれど、それが何のための差し入れなのか、乙松にははなからわかっていた。機関区の前顔たちはユツコの命日をちゃんと覚えていてくれる。まるでタブレットの輪でも手渡すようにさりげなく供物を渡し、乙松もまた彼らの好意を黙って受け取る。

乙松は木柵の改札に立って雪の積もった駅長帽をとり、轍の音の遠さがる雪の闇に頭を下げた。

こんな立派な籠など食いきれぬわけもないから、送りがてらにこのまま円妙寺に届けて供物にすべえ、と乙松は思った。「さあて、おねえちゃん行くべや。デゴイチのプレート持ってけ。そうそう、お人形も忘れずになあ」

そう言つて湯気に曇つた事務室の扉を開けたとき、乙松はぎよつと足を止めた。

(……おつかあ)

いや、ちがう。だが座敷にちんまりと座つた赤い綿入れ半纏の後ろ姿が、一瞬死んだ女房の背中に見えた。

「どうしたの、おじさん。はい、ごはん食べよ」

「あれえ、こつたらごちそう、あんたが作つてくれたのかい」

「勝手に『レイゾウ庫あけちやつたけど、ごめんね』

「なんもだ……今の間にあんたこれ、みんな作つたのかい」

小さなちやぶ台の上には、干物と卵焼きと野菜の煮付が、二人分きちんと置かれていた。

「これ、使つていいですか」

炊きたての飯を盛りながら、少女はにっこりと笑つて茶碗と箸を手を取つた。

「死んだおつかあだけど、よかつたらどうぞ——いやあ、おっちゃん、びつくらこいちまつて、あんた料理じょうずだねえ」

「電気釜だと時間がかかるから、お釜で炊いたの。あんまりうるかさないで炊いたもんで、めっこはんかなあ」

「まあ、残りもんでこつたらごちそう作るなんて、あんたかまど持ちの良い子だねえ。なんだか魔法にかけられたみたいだべさ。そんじゃ、遠慮なく」

「私、鉄道の人のお嫁さんになるのが夢だから、こつたらふうに手早く作れねばだめしよ」

「うん。合格だべさ」

味噌汁を口にしたとたん、乙松は愕くよりもふしぎな気持になった。死んだおつかあの味だった。

「おいししよ」

「え……ああ。おっちゃん、なんだか胸がいつぺえになつちまつた」

「なして」

ユツコが生きていたら、母から教わつた味噌汁を、こうして食わしてくれるのだろう。最終を送り出したあと、いつもこ

んな夕餉ゆうげが自分を待っているのだろうと、乙松は思った。

乙松は箸を置いて、膝を揃えた。

「おっちゃん、幸せだ。好き勝手なことばっかして、あげくに子供もおっかあも死がせて。だのにみんなして、良くしてくれるしよ。ほんとに幸せ者だべさや」

「ほんとに？」

「ああ、ほんとだとも。もういつ死んだっていいぐらいだべさ」

電話が鳴った。サンダルをつっかけて乙松は事務室に下りた。

「もしもし。ああ、和尚おすさんかい。明けましておめでどう。おねえちゃん、すっかり引き止めちまった。いやあ、めんこい子だねえ。いま飯まで食わしてもらってるべさ」

円妙寺の和尚の電話は、帰りの遅い孫娘を氣遣ってのものではなかった。とんちんかんなやりとりの後で和尚は、今年の供養はどうするのか、と言った。

電話を切ってから、乙松は振り返ることができずに、肩を落として椅子に座った。和尚の音が耳の奥でぐるぐると回った。

(乙さん、あんたボケちまったんでないかい。良枝も誰も、帰ったりやせんよ)

乙松は机の上のセルロイドの人形を手にとって、黄ばんだレースの洋服を指でもてあそ弄もんだ。

「こつたらことって、あるだべかやあ……」

出札口のガラスに、うなだれる少女の姿が映っていた。

「……おめえ、なして。嘘うそついたの」

凍えた窓に、さあと音立てて雪が散った。

「おっかながるといけないって、思ったから。ごめんなさい」

「おっかないわけないでないの。どこの世の中に、自分の娘をおっかながる親がいるもんかね」

「ごめんなさい。おとうさん」

乙松は天井を見上げ、たまらずに涙をこぼした。

「おめえ、ゆうべからずっと、育ってく姿をおとうに見せてくれたってかい。夕方にヤランドセルしよって、おとうの目の前で気を付けて見せてくれたってかい。ほんで夜中にや、もうちよつと大きくなって、またこんどは美寄高校の制服さ着て、十七年間ずっと育ってきたなりを、おとうに見せてくれただけ」

少女の声は降り積む雪のように静かだった。

「したっておとうさん、なんもいいことなかったしよ。あたしも何ひとつ親<sup>オ</sup>コウコウもできずに死んじやったしよ。だから」

乙松はセルロイドのキューピーを胸に抱いた。

「思い出したんだべさ。この人形、おっかあが泣く泣くおめえの棺箱<sup>かんぼこ</sup>に入れたもんだべ」

「うん。大事にしたよ。おとうさん、美寄で買ってきてくれたしよ。おかあさんがレースの服あんでくれて」

「そつたらこと、おめえ……おとうは、おめえが死んだときも、ホームの雪はねてただぞ。この机で、日報<sup>ヒョホ</sup>書いてただぞ。本日、異常なしって」

「そりやおとうさん、ポップヤだもん。仕方ないしよ。そつたらこと、あたしなあんとも思っ<sup>D</sup>てないよ」

乙松は椅子を回して振り向いた。ユッコは赤い綿入れの肩をすぼめて、悲しい笑い方をした。

「めし、食うべ。めし食って、風呂へえって、おとうと一緒に寝るべ。な、ユッコ」

その日の旅客日報に、乙松は「異常なし」と書いた。

夜半に雪がやむと、幌舞のボタ山の上には銀色の満月が昇った。

(浅田次郎『鉄道員』より)

\*出題の都合上、原文の一部を改変してあります。

問1 傍線部ア～オのカタカナは漢字で、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

ア 饒舌    イ セイフク    ウ 喚呼    エ レイゾウ    オ コウコウ

問2 傍線部A「少女」とはだれですか。最も適するものを1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 乙松の娘
- 2 和尚の孫娘
- 3 村の子
- 4 子供の死に神

問3 傍線部B「乙松が一番悲しい思いをした」時に、泣く代わりにどのような行動をとりましたか。最も適さないものを1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 涙のかわりに笛を吹いた
- 2 げんこのかわりに旗を振った
- 3 敬意を払って帽子をとった
- 4 喚呼の裏声を絞った

問4 傍線部C「嘘」を乙松が気づいたきっかけは何か。文中から九字で抜き出しなさい。

問5 傍線部D「あたしなあんとも思っていないよ」とありますが、少女は何についてなんとも思っていないと言ったのでし  
ようか。あなたの考えを三十字以内で答えてください。